

野球から学んだ「無駄のない動き」

災害復旧でつかんだ 揺るぎない誇りを胸に 一秒でも早く電気を送る

野球への情熱を胸に秘め
配電の業務に
真剣に取り組む

中部電力旭名東営業所の配電運営課に勤務する馬場隆司にとって「野球」は、仕事に精力的に取り組むための原動力のようなものである。

愛知県春日井市で生まれた馬場は、父親の影響で子どものころから大のプロ野球ファン。ナゴヤ球場はもちろん、時には東京まで観戦に行くほど熱中した。実際にプレーヤーとしてボールを握るようになったのは中学に入学してから。その年に新設されたばかりの軟式野球部に第一期生として入部した。

中学校3年間の野球生活で馬場が最も興味を抱いたことは、「動きの質」。あまりに奥深く、もつと追求

したくなって、野球にのめり込んだ。うまい仲間の動作をしっかりと観察し、自分のものにしようと取り組んだ。この経験が、後の配電マンとしての社会人生活に大きく役立つことになる。

練習のない日は、実家が営む食堂の出前をよく手伝い、その得意先のひとつに中部電力の春日井営業所があった。

「出前に行くとき、仕事が終わった後で野球の練習をしている社員の方の姿をよく見かけました。聞くと、中部電力は野球が盛んとのこと。中学生だった私は、仕事も野球も真剣に取り込む社員の姿がかっこいいなあと憧れていました」

顔なじみになった中部電力の社員に「一緒に頑張ってみないか？」と勧められたこともあり、採用試験を

受けて合格する。馬場と中部電力は、野球が取り持つ縁で結ばれたのだ。

入社後は、能力開発センター（現・人財開発センター）で2年間、寮生活しながら配電の仕事を徹底的に仕込まれた。もちろん軟式野球部にも入部し、新人のころから頭角を現す存在となった。その後、配電部門一筋に渡り歩く間も、野球部を続けて、会社以外でも同時に複数チームに所属し、仕事と野球づけの毎日を送った。

32歳になると、名古屋支店に配属され、社員教育を担当した。配電部門の仕事は、高い電柱に昇ったり、電気の通った電線を扱うなど常に危険と隣り合わせにある。それだけに現場に向かうと、装備に不備がないか、危険につながる動作をしていないかといった確認を徹底し、身を守



【旭名東営業所・配電運営課】

発電された電気は送電口を少なくするために、50万、27万5,000Vという超高圧で送電され、その後、変電所を経由し、配電用変電所で6,600Vまで下げられる。そこからは、電柱などに設置されている変圧器で200V、100Vに変圧し、最終的に引込線を通じて各家庭に届けられる。配電部門は、その最終行程を担う。管轄する配電線の総延長は地球一周の約1/5にあたる、約9,340kmに達する。

る。安全を守るために、厳しい規律が求められる組織である。

プライベートでは、野球がしたいという後輩のために自らチームをつくり、監督も務めた。初心者にも懇切丁寧に指導し、仕事からプライベートまで、自分と10歳ほど年の離れた後輩たちの面倒をよく見た。

「野球、仕事、プライベート関係なく、何でもよいので、後輩が自分を出せる雰囲気づくりに努めました」
入社間もない後輩たちにとって、野球を通じプライベートで先輩と接する機会は、職場という組織に溶け込むことにも大いに役立った。

東日本大震災の 停電復旧支援を通して 安定供給の使命を痛感

仕事と野球は、馬場の生活をバラ



馬場隆司(ばば・たかし)
中部電力旭名東営業所・配電運
営課。1990年に入社。能力開発
センター(現・人材開発センター)で
2年間、寮生活をしながら配電の仕事
を学び、中村営業所へ配属。小
牧、稲沢、一宮の各営業所を経て、
名古屋支店配電技術グループで4
年間若手の教育担当を担う。その
後現職に就き4年目を迎える。

Voice of the spot

後輩の動作について、的確に指示を出す。多い日には一日で約30力所の電柱を回る。

馬場隆司(ばば・たかし)が語り当
られたのは、茨城県内
でも被害の大きい地
域。停電の復旧作業そ
のものは普段やってい
ることとほとんど変わ
らないが、電力会社に
よって使用する機材が
異なるため、勝手が違
い思うように進まな
い。余震も多く、その
度に作業は中断する。

部電力からも多くの配電部門の担当
者が派遣された。その一員となった
馬場が向かったのは、援助要請のあ
った茨城県の東京電力水戸営業所。
道中、静岡県の沿岸は
津波警報が発令され、
通行止めとなった東名
高速の代わりに、まだ
開通していない新東名
高速のデコボコ道をひ
た走った。

ンスよく支えた。結婚後もそれは変
わらず続く。妻は、毎日忙しく働き
ながら週末になると野球の試合に出
かけていく夫にあきれながらも、明

るく家庭を守ってくれている。
そんな馬場が、「それまでの仕事
人生で最も印象に残っていること」
として語るのが、東日本大震災によ

って停電した被災地で復旧作業に当
たった時のことだ。
震災が起きるとすぐに、東北電力
や東京電力をサポートするために中



現場に向く前の確認作業。業務の確認と同時に、一日の後輩の安全に気を配る(右端が馬場)。

それでも一カ所一カ所、確実に停電を復旧させ、また次の現場へ移動する。

津波に襲われた地区に比べると、まだ被害は少ない方だったのかも知れない。それでも、あちこちで建物が全壊し、電柱や道路標識などが倒壊している。しかもガソリンが不足しているため、作業車の移動もままならない状況だった。

「肉体的な疲労もどんどん蓄積するけれど、そんなことよりも、次から次へと目に飛び込んでくる荒れ果てた町の光景や、ただ茫然と立ちす

くむしかない方々の悲しい思いに触れなければならぬことが一番辛かったです。「一刻も早く、一軒でも多く電気を送らなければ」という使命感だけが、われわれを動かしていたのだと思います」

中部電力のマークが入った作業車を見て、「名古屋から来てくれたんですか、ありがとう。気をつけてがんばってくださいね」と声をかけてくれる人もいた。

「励まさなければいけないのはわれわれの方なのに、逆にそういう言葉にこちらが元気をもらい、もう1度自分を奮い立たせたことが何度もありました」

馬場は今、配電の仕事に誇りと喜びを感じている。被災地の復旧支援を経験し、そう言い切れるようになった。

野球から学んだ「配電マン」 としての無駄のない動きを 後輩に伝えたい

配電担当者は、何かトラブルが起こると、その解決に向かって直ちに全員が結束する。「俺たちが何とか

しなければ」という一点に思いが集中するからだ。その結束力、テキパキと現場へ向かう姿に憧れを抱く社員も多い。

「どんな場合でも、安全第一を忘れてはならない。それだけは肝に銘ずるよう、後輩たちに言い聞かせています」

最高で6千600ボルトの電圧を扱い、常に危険がつきまとう仕事には、当然チームワークやよどみない連携が求められる。それだけに馬場は緊張感を持って、手本となる先輩の仕事をよく観察し、自分のものにしてきた。

「私自身、先輩から『俺のやり方を見て盗め』と言われて育ちました。例えば電柱の上での作業を安全かつスムーズに進めるには、それなりのコツがある。それは教わっただけで身につくものではありません。指導する場合もされる場合も、大事なものは相手の動きをしっかりと観察し、見て覚えることなんです」

馬場がプロ野球観戦に行き、最もわくわくするのは試合前の練習時間だ。ノックのときの選手の足運び、



現在は、プライベートの野球でもコーチの立場で後輩の育成に当たる馬場。

ボールさばきなどを観察していると、プロ選手の動きの無駄のなさに惚れ惚れする。それを後日、自分で真似てみて、何度も練習を繰り返していると、次第にその動きが身についてくるのだという。

「配電の仕事もプロ野球選手と同じように、動きに無駄があるとそれだけ電気を送る時間も遅れてしまう。だからプロとして、ベテランの配電マンとして、無駄のない動き、つまりお手本を後輩に見せてやるのが先輩の務めだと思っています」
生え抜きの配電マンは今日もまたどこかで後輩の手本になるべく、配電業務に当たっている。

文・構成／丸上直基
撮影／加藤有紀